

# 周年放牧で生産された黒毛和種去勢子牛の吸乳期および 育成期の発育値と枝肉形質との関係

池田博文

## 目 的

Tarr, S. L. (1994) は子牛へのクリープフィーディングは子牛の発育を向上させるが、フィーディング期間の違いは、フィードロット肥育での枝肉成分に影響を与えないことを報告している。一方、Faulkner, D. B. (1994) は飽食条件下で、クリープフィーディングされた子牛は、フィードロット内での肥育における肉質が優れていることを報告している。

このように、肉用子牛の初期発育と肥育での枝肉形質との関係については、一定の結論が得られていない。また、上述の報告は、いずれも米国における生産・肥育条件下での成績であり、我が国における黒毛和種の生産と肥育技術に当てはめることは困難と思われる。

本研究では周年放牧方式で生産され、吸乳期にクリープフィーディングされた黒毛和種子牛の吸乳期および肥育開始前育成期の発育値と肥育後の枝肉諸形質との関係を検討し、周年放牧生産子牛の肥育素牛としての適正な発育値を明らかにしようとした。

## 材料と方法

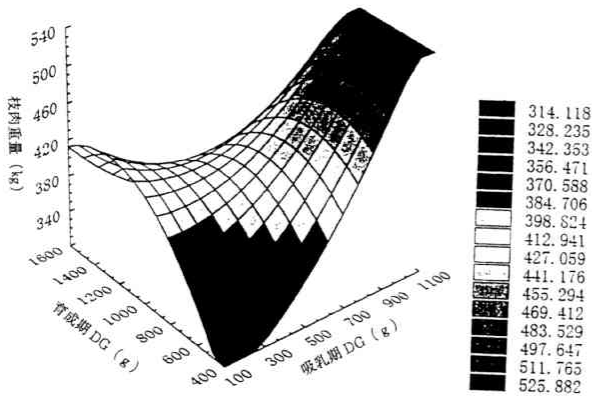
鹿児島大学農学部附属農場入来牧場で、周年放牧方式により生産され、吸乳期に高低差利用の親子分離施設（サツマゲイト）でクリープフィーディングした黒毛和種去勢子牛75頭を肥育した（1993年7月から1995年3月までの間に出荷）。生時から肥育開始時までの調査項目は離乳時日増体重（DG）、肥育開始前育成期間日増体重（DG）、肥育開始日齢、肥育開始体重および肥育開始時日齢体重とした。枝肉形質は調査項目は重量、ロース芯面積、皮下脂肪の厚さ、「バラ」の厚さ、BMS. NO（ビーフ・マーブリング・スタンダード）および総売上額とした。

## 結果と考察

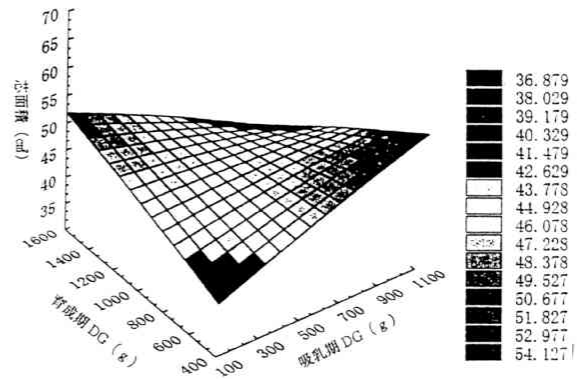
枝肉重量は吸乳期 DG が高まるほど高くなり、また育成期 DG が 800～1,100 g 程度で、最も重くなる傾向を示した（第1図）。ロース芯面積は、吸乳期 DG が高まるほど、また、育成期 DG が高まるほど広くなる傾向を示した（第2図）。皮下脂肪の厚さは、吸乳期 DG が低く、育成期 DG が 1,000 g 程度で厚くなる傾向を示した（第3図）。このことから、吸乳期の DG が低い状態で急激に育成期での DG を上げることは、皮下脂肪を厚くするものと推察された。「バラ」の厚さは、吸乳期 DG が高まるほど、また、育成期 DG が 1,000 g 程度で最も厚くなる傾向を示した（第4図）。BMS. NO は吸乳期 DG が 700 g 程度で、育成期 DG が 1,100 g 程度で最も高くなる傾向を示した（第5図）。その結果、枝肉の売上額は、吸乳期 DG が高まるほど、また、育成期 DG が 850～1,100 g 程度で最も高くなる傾向を示した（第6図）。

## 摘 要

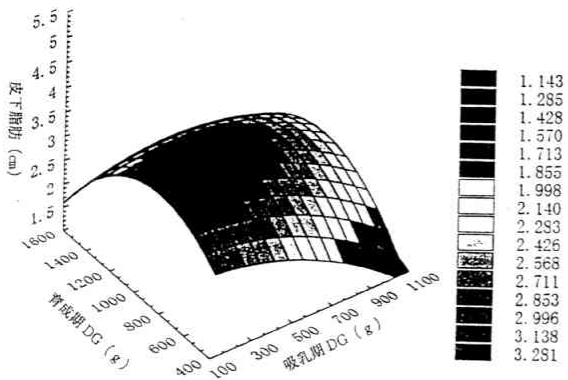
周年放牧子牛の肥育段階での産肉能力を高めるには、現在の吸乳期 DG ( $586.1 \pm 153$  g) を 700～800 g に高める一連の技術開発が不可欠であると考えられる。



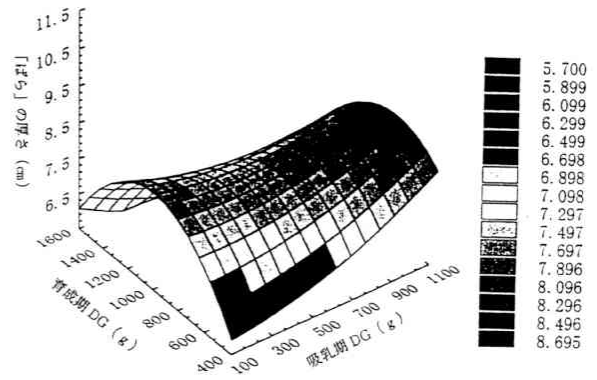
第1図 周年放牧で生産された去勢子牛の吸乳期DGおよび育成期DGと枝肉重量との関係。



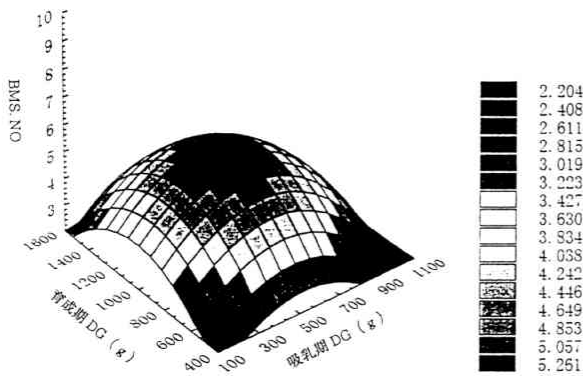
第2図 周年放牧で生産された去勢子牛の吸乳期DGおよび育成期DGとロース芯面積との関係。



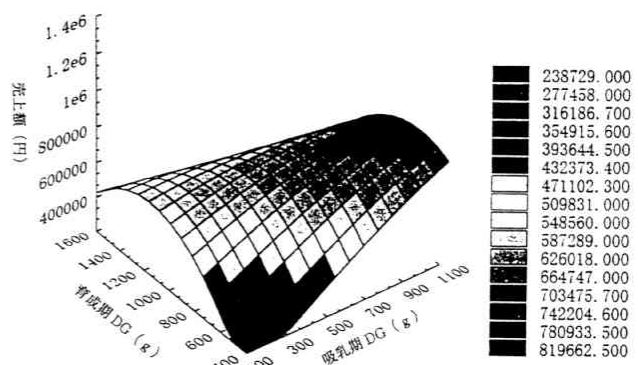
第3図 周年放牧で生産された去勢子牛の吸乳期DGおよび育成期DGと皮下脂肪の厚さとの関係。



第4図 周年放牧で生産された去勢子牛の吸乳期DGおよび育成期DGと「ばら」の厚さとの関係。



第5図 周年放牧で生産された去勢子牛の吸乳期DGおよび育成期DGとBMS. NOとの関係。



第6図 周年放牧で生産された去勢子牛の吸乳期DGおよび育成期DG肥育終了時売上額との関係。